
the Third World War

奈瑠華美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e T h i r d W o r l d W a r

【Nコード】

N 3 9 5 8 H

【作者名】

奈瑠華美

【あらすじ】

傭兵として戦う渚、ヨシユア、ウェンルー、桃華、マルコ、様々な人と出会い、助け合いながら生きる意味を見つけていく笑いあり、涙あり、そんな物語です。

FILE 1：開戦（前書き）

グロテスクな表現が入りますので苦手な方はご遠慮ください。

FILE 1：開戦

Scene 1 開戦

「目標まであとのくらいだ？」

爆撃機 B - 2 スピリットのパイロット、朝霧渚、すなわち俺は味方との通信を開いた。

「馬鹿やろう！ 傍受されたらどうすんだ！ あと五分の距離だぞ！」

うるっせえなあ、

あいつヨシユア・レインフィールドはいつもそうだ。心配しすぎなんだよ。

「目標に通信傍受システムはない」

「うるせえ！ 念のためだ！」

はあ、こいつ以外に極度の心配症の奴がいたら会ってみたいもんだすると、突然落ち着いた女性の声が聞こえてきた。

「後一分よ、準備して」

声の主中国人のシー・ウェンルー、これがなかなか色っぽい、は二人に告げた。

「あいよ、デルタ2準備完了」

ヨシユアの乗るB-2の下から大型の爆弾が現れた。

「デルタ1、完了だ」

一応、隊長である俺も同じようにする。

「デルタ3、もちろんよ」

ウェンルーの機体も同様にする。

「よし、じゃあ爆撃開始！」

俺はそう言いながら爆弾を投下した。

残りの二人もそれにならい、爆弾を投下する。

爆弾が地面に接した瞬間、すさまじい音と共に紅蓮の炎が辺り一面に広がる。

「目標の戦滅を確認、ミッション完了。帰還する」

今回のミッション、それは敵の前線基地の破壊。

この場合敵はロシア。

俺たちは私立傭兵部隊「ローレンス」

ネーミングに意味は無いらしい。

FILE 1：開戦（後書き）

初めて書く小説です。

誤字や脱字など至らぬ所があるかもしれませんが
どうか、見守ってください。

感想お待ちしております。

FILE 2：玄関、それは悲劇の溜まり場（前書き）

基地の玄関でのお話です。

FILE 2：玄関、それは悲劇の溜まり場

scene 2 一時の休息

「「「ただいまあ」「」」

扉があいた瞬間、三人の声が同時に響く。

パン パン

三人が同時に一歩踏み出すとクラツカーの音が鳴り響いた。

「「ナギおかえりいゝ、寂しかったよおゝ」「」

そう叫びながら俺に飛びついてきたのは鳴海桃華、オペレーターだ。ちなみにナギって言うのは俺のあだ名だ。

まったく、こいつは帰ってくる度に抱きついてきやがる。さらに天然が入ってるせいか、いつも目の前で

「ひぎゃっ」

・・・こけるんだよね。

「馬鹿が」

見下しながら言う俺に桃は

「あ、それ新しいプレイ？言葉責めって奴？」

ドガッ

「なんて事言っただ！謝れ！全国の読者の皆様に謝れ！」

キレる俺、ため息を着くヨシユアとウェンルー、不思議そうな目でこつちを見つめる桃

「ドクシャってなに？」

は！しまったあ！これはトップシークレット、誰にも言ってはならないのだ！

「ど、読者じゃない！ど！どあ！ど！どか！った！たらー！」

「あひひー、ナギが壊れたあー」

ああ、もうだめだ。

自我が崩壊していく。

「おどき、おどきー！カレン様のお通りだあ！」

そう言いながら駆けてくるのはカレン・クロスロードクロスロード家の跡取り娘だ。

クロスロード家とは莫大な財産を持ち、
軍事的、政治的にも強い力を持ち、ローレンスの資金源でもある。

そんな所のご令嬢が持っているのは、「パイ」、それも「アップルパイ」だ。

「アップルパイ」を片手に持って突っ込んできたカレンが視界に入
った途端

ぶちやあ

変な音と共に視界が赤くなってゆく。

俺の世界は今、「アップルパイ」に支配されている。

その匂いにつられて、ローレンス唯一の動物、猫のジャックがやっ
て来た。

「んにやあ
」

一声鳴くと俺の顔についている「アップルパイ」をなめ始めた。

「パイ」の容器が鉄製だったため、

その衝撃を受けた俺の意識はフェードアウト

FILE 3：夢か現か（前書き）

初のもともな戦場シーンです

FILE 3：夢が現か

（ん・・・ここは？）

目を開けるとどこかのテントの中に立っていた。
十二畳ほどのスペースで、真ん中に大きな机がある。
それを囲んで五人の人が話し合っていた、

（何かの地図か？）

不審に思う俺の周りで話し合いは続いている。
というより、つづいているようにみえる。
なぜか、声が聞こえないのだ。

その時五人の中の一人が感慨に耽っていた俺の顔をのぞき込んできた。

その目はとても穏やかで優しい目だった。

（何だこの感覚・・・知ってる？俺はこいつを知っているのか？）

その瞬間、世界が真っ暗になり、再度目を開けると、
戦場だった。

血と硝酸の臭い、戦場特有の緊迫感

俺は塹壕にいた。

頭上を鉛弾が飛び交い、仲間が次々倒れていく中、
とにかく塹壕を進んでいく。

時々上からくる敵はアサルトライフルのG36Cで殺し

前から現れる敵は距離が近いためショットガンを使用

（くそっ！どこまで行くんだ！そもそも何処へ何故行ってるんだ）

そんなことを考えていると、視界に教会が入った。

（そうだ、俺はここに行かなきゃ行けないんだ。）

しかし、教会の周りは敵兵の守りが堅く、おまけに戦車までいる始末だ。

（教会の入り口を確保する。まずは周りの奴等から排除だ！）

俺は恐らく俺の部下であろう人物に言った。

（二手に分かれてαチームが正面から、βチームはジャベリンを使い、左側面から戦車をやれ。）

そう言うのと部下達を二つに分け配置につかせた。

（俺の合図で攻撃開始だ。・・・1・2・3、ファイア！）

号令とともに銃撃戦が始まる。

敵も味方も次々と倒れていく。

塹壕をでてから隠れていたブロック塀も限界が近づいてきた。

他の場所にカバーへ入ると同時にさっきまでいた場所へ

敵戦車M1エイブラムスのAPFSDS（装弾筒付翼安定徹甲弾）が着弾し地面ごとブロック塀を消し飛ばした

（やはり戦車が厄介だな、βチームは何をやっている）

その時、戦車の頭上へ何かが直撃し、戦車を破壊した。

（βチームか、ナイスだ）

FILE 3：夢か現か（後書き）

PSPから投稿なのでなぜか変なところで書けなくなってしまう
そこはご容赦を・・・

次回でこの場面終わりにできるかな？

FILE 4：夢か現か（2）（前書き）

ちよつとエッチです

FILE 4：夢が現か（2）

「

」

やはり声は聞こえない。

まあおそらくは破壊しました的のことを言ったのだろう。
とにかく今は中に入ることが先だ。

所々焦げている草の上をブーツで一步一步、しっかりと歩いていく。

教会はもう目の前だ。

ドアノブに手をかけた。

白い天井

清潔なシート

食欲をそそる心地よい匂い

窓から見える「作られた」海

その全てがさつきまでとは違っていた。

夢、だったのか？

それにしては現実味がありすぎたよな、何だったんだ？

「それより此处、何処だ？」

そこはとても綺麗で

とても明るくて

とても広い

でも、心の底から寂しくなる。

そんな場所だった。

「ああ！ナギの目がさめたあ！」

「桃華？何でこんな所に？それより、此処は何処なんだ？」

「此処？此処は桃の家だよ？だから桃が居るんだよあ」

此処が桃華の家？あいつって一人暮らしのはず？
なんだよこの広さ。

この部屋だけでも三十畳はあろうかという広さだ。

こんなところに一人暮らしかよ。
寂しくねえのかよあいつ。

「まっててねえ、もうすぐお粥が出来るからあ」

そんな俺の心配とは裏腹に桃華はスキップしながらキッチンへ戻っていった。

再び戻ってきた桃華の手にあったのは今まで一度も目にしたことがないくらい豪華で美味しそうなお粥だった。

「これねえ桃が作ったんだよあ！」

警戒しながらも一口目を口に運んだ。

刹那！瞳の奥で水面につぼみが触れて弾けた。

「う、うまい！上手いうえに巧いし、さらに旨い……うますぎる……」

もはや、それしか言うことが出来ないほどの旨さ。
うまいがその時ほど同時に様々な意味を込められたことはないだろう。

それほどまでに桃華の作ったお粥は美味しかった。

「えへへえ、ほめてほめて」

「んっ。えらいぞ桃華」

なでこなでこ
するとお粥の美味しさに気をとられて忘れるところだったことを思い出した。

「なんで俺は桃華の家にいるんだ？」

俺はその日一番の疑問を桃華に聞いた、が桃華に聞いたこと自体が馬鹿だった。

「付き合ってるんだしい、愛しのナギは桃が面倒見るんだよ。よし！元気になるようにチューしてあげるう。」

ペシイン

「いたあい！ナギが叩いたよお！うえおおおん！」

くそう！こいつに聞いた俺が馬鹿だった！

「調子に乗ってふざけたこと言うなあ！まだ付き合っていないからな！お互い好きになっただけだからな！」

「そついうのをお素直になれない純粋な愛じょ」

ペシペシィン！

「うえおおん！ナギがまた叩いたあ！うえおおん！」

「お前が言いたいことはわかったわ！分かったから！人の服で涙を拭くな！ああ！鼻水はもつとだめだあ！」

二人して格闘していると自動ドアが開き、ヨシユアとウエンルーが入ってきた。

「おゝいナギ、ヨシユア様がお見舞いに・・・！！！」

「どうしたの？私にも見・・・！！！！！」

二人が驚くのも当然ベッドの二人は熱く抱き合っているようにしか見えないのだから。

ヨシユアとウエンルーは後ろへ下がり、何も言わずに笑顔のまま自動ドアだけが閉まっていった。

「・・・ちがああう！これは誤解だ！誤解なんだ！俺たちは決してそんな仲には！」

叫んでみても意味はなし。
拳げ句の果てには

「続き、しよお。」

もうやめてくれえええ！

小休止

「で、今に至るといわけか。」

ようやく戻ってきたヨシユアとウェンルーに事の詳細を話したが、
どうもヨシユアは信じてないらしい。

「お前が桃にそんなことをしたくなる気持ちも分かるぞ」

「だから違うつて！何度言えばいいんだ！」

「あんだだけの巨乳だもんなあ、おっぱいボーンッだぜ？」

こいつは本当にエロい。

根はいい奴なのに。

「ウエンはあれだもんよ、ペッターで、もうちよつとデカけりやあ
なあ。まあ俺としては、貧乳もステータスとしてだな」

などと語るその背後に影が迫っているのに気づいたとき、

彼は後頭部に強烈な跳び蹴りを食らいベッドの角に鼻をぶつけてい
た。

小休止

「貧乳が悪いって言った訳じゃねえだろお」

「そういう問題じゃなああい！何であんたはそうもえ、え、ええ、エロいのよ！」

必死で弁明するヨシユアだがウェンルーが怒っていることとは違ってたようだ。

「あ、あのお、一つ聞きたいことが、」

「「あんたは黙って」」

二人に同時に言われちゃあかなわないよ。

「どうして此処に来たかだろう？」

声のした隣を見るとカレンが立っていた。

「カレン！いつ間に！」

驚きと畏怖の念を込めた視線にカレンは

「私には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わってるのよ。」

と、だけ答えた

小休止

「でどこにいます？」

「そつだ」

なんでもカレンにアップルパイボンバー（カレンが名付けたんだよ）を食らって気絶した俺はとりあえず医務室に運ばれた、しかし医務室のベッドが満員だったためやむをえず此処に移されたらしい。何故かって？桃華が名乗り出たからさ。とにもかくにもそういうわけで此処にいるわけだ。

「しかしまあなんだ、広すぎるだろこの家、あいつは寂しくないのかよ？」

隣にカレンはおらず、代わりに桃華が立っていた。

「桃は大丈夫ですよお、強いもんつ、」

そう言う桃華の目は少し潤んでいた。

「桃華、お前」

なんて声をかければいいのか。どうすれば桃華は笑ってくれるのだろう。

気づくとそんなことを考えてた。

桃華は泣いていて、それなのに嬉しそうだった。

「桃、こんなの久しぶりで、家がこんなに賑やかになる事なんてなくて、嬉しくて、」

そう言いながら俺に寄り掛かってきた。

まあ、服なんていくらでもあるんだ、涙ぐらい拭かせてやるか。

「桃華……鼻水は拭くなよ」

FILE 4：夢が現か（2）（後書き）

ここまで読んでくれた読者の皆様ありがとうございます。
たったの四話目ですが既にくじけそうな自分がいました。

もうやめてしまおうかなと思うこともありましたが、もしかしたら
読んでくれている人がいるかもしれない！

続きを楽しみにしている人がいるかもしれない！

そう自分に言い聞かせ頑張りました。

正直、メッセージがないと寂しくて、一つでも来たら桃華のように
泣いてしまいかもしれません。

そんな諸事情は置いとして

ここまで読んでくださった方々には感謝感激雨霰です！

これからも未熟ながら頑張っていきます。

さて、本編の方ですが・・・主人公くつつくの早くね？

自分で作ってて思いました。

普通もつと戦いとか葛藤とかを通していくものだと思うんですけど
ねえ。

この作品、行き当たりばったりで作ってしまって

ストーリー構成とか細かくはないです。

あと途中からロボット出すつもりなんですけど、どうでしょうか。

いや、自分で決めるよですね、はい

その辺も含めてメッセージを頂けたら超ベリーベリー嬉しいです。
少しふざけすぎた気もしますが次回「日本争奪戦」をお楽しみに

FILE 5：悲しみと償い（前書き）

いろいろありまして日本争奪戦がロシア東部争奪戦になりました。
さらに次回です。すいません

FILE 5：悲しみと償い

大東亜帝国

旧名日本

そこは「將軍」が支配するアジアの半分を占める帝国

今回の依頼主はロシア

占領されたロシア東部の奪還が目的

ロシア側にはEU加盟国とローレンス機動隊一個中隊を派遣

大東亜帝国側の戦力は未知数

中隊長は朝霧渚

副隊長にシー・ウェンルー

大まかな作戦はロシアとEUが正面から突撃、私達はアムール川に沿って敵拠点であるハバロフスクをたたく

作戦開始は一週間後

以上で任務の説明を終わります。

そう告げるとクリア・ユニーラは持っていたファイルを閉じた。

彼女はローレンスの司令、ものすごく真面目でものすごく几帳面

「あと一週間かぁ、遊びまくるぞぉ」

途中、説明を聞いていたかさえ危ういヨシユアの能天気な声がブリーフィングルームに響いた。

「ヨシユア君、この一週間は戦闘準備のための一週間です。一切遊ばせませんよ！」

「そんなっ！いいじゃないすかぁ、司令い」

全く、戦闘中はあれだけ心配症なのに戻ってくるとすぐこれだ。

「お前なあ、戦闘中の心配症を半分私生活に持ってこい。」

そんな俺の声が聞こえているかどうかさえ分からないくらいにヨシユアは落ち込んでいた

「はっはっはっ！まあよいではないか、少しくらい遊ばせてやれ」

高らかな笑い声と共に現れたのはローレンスのボス、ガブラ・バトルフェルだ。

普段は優しいのだが怒った時はとてつもなく恐ろしい。

「しかし、ボス！」

反論しようとしたクリアを遮ってガブラは小声でクリアにだけ言った

「一週間後にはあいつらの誰かが死ぬかもしれない、いつ何が起くるか分からない死地へ行くんだ、せめてそれまでは楽しませてやる
う」

クリアにそう言った後ガブラはすぐに付け加えた。

「そんなこと信じたくも無いがな」

クリアは渋々と言った様子で頷いた。

「なあ、今度みんなで遊園地に行かないか？」

完全に遊びモードのヨシユアは浮かれた様子で聞いてきた。

「私はいいけど、ヨシユアは？」

んー、どうするかなあ・・・
どうせ暇だし、いっか。

「俺も行くよ」

「桃もいくう！」

俺の真横には目をキラキラさせている桃華がいた。

「まいだありんのナギが行くのにい、桃が行かなかつたら悪い女が寄ってくるからね」

ペシイン

「あいた！ナギが叩くよお！助けてえ」

そう言いながら桃華はウェンルーに抱きついた。

「ほら渚、ちゃんと謝って」

抱きついている桃華をそのままに、ウェンルーは俺に言った。

くそ、こうなった時のウェンルーにはかなわねえんだよ！
ったく、どうして俺が。

「分かったよ、俺が悪かった」

それでもウェンルーに抱きついたままの桃華を見ながら、ヨシユア
が一言。

「女の子同士の絡みもありだな」

次の瞬間、ウエンルールのハイキックが炸裂していた。

「つてえ、あそこまで本気で蹴ることあねえだろ」

ブリーフィングルームを出た男二人は基地を出て、町を歩いていた。

「お前の言動に問題があるんだよ」

俺はヨシユアの馬鹿さ加減に呆れ空を向いていた。

「それでも、本気で蹴ることはないだろ」

俺はヨシユアの話聞いていなかった。

地下都市ボルゲル

旧ハワイの下に作られた人工都市

身よりのない子や難民を受け入れ共存している作られた世界

俺はここで生まれた。

傭兵だった父と母は俺が幼い頃に死んだ。ガブラに拾われた俺は望んで両親と同じ道に行くことにした。

「なあ、お前はどっ思うよ」

突然訪ねられた俺はギクリとしてヨシユアの方を向いた。

ヤベッ！こいつの話聞いてなかった！

「お、俺には、わ、わかんねえなあ」

苦し紛れのデタラメだったが質問には合っていたらしくヨシユアは
そうか、とだけ言った。

「お前さ、どうして桃華と付き合わないんだ？」

ヨシユアが聞いてきたことは凄くまともな事で、俺は答えるかどうか少し迷った。

けれど、ヨシユアは信用できる奴なので話すことにした。

「俺がまだ傭兵になる前は付き合う手前だったんだ・・・でも俺が傭兵になってからはいつ死ぬかも分からないし、あいつを悲しませなくなかったから一度分かれたんだよ。なのにあいつはオペレーターとして来たんだ。色々話し合ったけど結局まとまらなくて、付き合うと、近くなりすぎるから・・・」

「そうか」

ヨシユアはそう言つと俺に向かってこう言った。

「確かに相手を悲しませないことは大事だよ、でも、お前は桃華にとつて一番悲しいことを知ってるのか？」

それは怒っているのでもなく、呆れているのでもなく、
本当に心配してくれている目だった。

「一番・・・悲しいこと？」

今まで考えたこともなかった。
俺が死んでしまうことがあいつにとって悲しいことだと思つてた。

「まあ、それが何かは自分で見つける」

遊園地に行く日、俺は風邪をひいてしまった。

微熱だったが作戦に行けなくなると困るので遊びには行かないことにした。

家で寝ているとインターホンが鳴り、来客を告げた。

ドアを開けるとスーパーの袋を持った桃華がいた。

「桃華？お前、遊園地は？」

確かに俺は行かないが、中止にはならなかったはず。

「ナギが心配だったんだもん、ナギだけ置いて遊べないよ」

時々こいつのこういう優しさが胸にしみる。

「で、何しに来たんだ？」

「ご飯作ってあげよおかなあって思ってたえ、えへへえ」

少し恥ずかしそうに桃華は答えた。

「好きにしろ」

俺は笑いながら桃華に言った。

「じゃあ、おじゃましまあす」

上がった桃華は早速晩ご飯を作り始めた。
具を切る音だけがするなか俺は桃華に聞いた。

「なあ桃華」

「なにい？」

「・・・・・・」

お前にとって一番悲しい事ってなんだ？
ただそれだけなのに言えない。

「呼んだだけ」

気づけばそんなことを言っていた。

作戦終わったら聞こう。

ヘタレだな、俺。

「起きてよおナギい」

う、うん？寝てたのか。

変な姿勢で寝てたのか首が痛い。

「ご飯できたよお、今日は桃特製うどんだよお」

目の前に置いてあるうどんはこれまた絶品だった。

「桃華、おまえ料理の才能あるんじゃないか？」

「ナギのためだよお、えへへえ」

笑っている桃華に対して俺は罪悪感を感じていた。

それを償うかのように俺はひたすら食べ続けた。

食べ終わり、食器を洗い始めた桃華に、まかせっきりだと思
い手伝いを申し出たが、あっさりと断られてしまった。

しかたなく俺は愛銃のアサルトライフルH&K XM8と
対物狙撃銃XM109ペイロードのメンテナンスを始めた。

俺のXM8は口径5.56mm、装弾数は5.56mm×45N
ATO弾で30発箱型弾装もしくは100発ドラム型弾装、発射速
度は毎分750発だ。

反動も小さく、銃口の跳ね上がりも少ないため片手でのフルオート
射撃も出来る。

さらに、銃身下部にはM320グレネードまたは12ゲージショッ
トガンレミントンM870を装着可能という優れ物だ。

かわってXM109ペイロードは口径25mm、装弾数は25×5
9Bmm弾で五発インナーボックスマガジン、最大射程は2400
m、使用弾はAP弾（徹甲弾）、AP弾に焼夷性能を持たせたAP
I弾（徹甲焼夷弾）、目標貫通後に爆発するAPE弾（徹甲榴弾）、
戦車の主装甲以外は破壊できるHEAT弾（成形炸薬弾）、BOR
S信管による空中炸裂弾がある。

メンテナンスを終え組み立てているといつの間にか桃華が横で見て
いた。

「組み立てるの早いねえ」

「なれてるからな」

感心したような声で言う桃華の横でX M 8を構えダットサイトをのぞき込む。

「すごおい！ナギかつこいい」

桃華は横ではしゃいでいる。

「ありがとな、いつも俺のために」

珍しくかけた感謝の言葉に桃華は驚いていた。

「今日のナギいつもとちがうねえ？でも桃は今日のナギの方が大好きい！」

抱きついてくる桃華、俺は銃を落とさないように机に置いてから桃華の頭を叩いた。

「いたあ、なんで叩くのお」

「抱きつくのは無しだ」

涙目で言う桃華に対し俺は毅然とした態度で言い返した。

「時間も遅いし、寝るぞ」

それだけ言って俺は布団を取りに行った。

「待つてえ！と、泊まって・・・いいの？」

おそろおそろ聞く桃華が可愛くて、少しいじめたくなった。

「だめ」

「えええ！？そんなぁ」

今にも泣き出しそうな目で上目遣いをする桃華。

少しいじめすぎたかな？

「うそうそ、いいよ」

一瞬で目をキラキラさせた桃華はこんな事を聞いてきた。

「一つの布団で？あんな事やあんな事をするのぉ？」

「やっぱ一人で寝るか」

「今のは冗談！うそだよぉ！」

必死に弁解するが俺は歩きだした。

桃華の弁解を聞きながら部屋の前まで来て扉を開けた。
すると、そこには布団が二つ並べてあった。

「お前は右側な」

俺はそれだけ言ってふとんに入った。

つられて桃華も俺の横に寝た。

「ナギい」

「んん？」

「大好きい」

「桃華・・・俺の布団に潜り込んでくるな」

FILE 5：悲しみと償い（後書き）

本当はここで戦闘にするつもりだったんですが、こんな話になりました。

いろいろ先のことを考えるとどうしても入れておきたくて
こちらでキャラ設定もだします。

「朝霧渚」

第一印象は優しそう。

人を寄せ付けるオーラと天才的な頭脳を持つ。

運動神経は主役四人の中で三番目、それでも並以上。
畏によるサポートと遠距離からの狙撃を得意とする。

純系日本人、黒髪、黒眼。

「ヨシユア・レインフィールド」

第一印象はかっこいい

かなりかっこいいが天才的な馬鹿である。

運動神経も二番に位置する。

そしてエロい！フランス人、金髪、青眼。

「シー・ウェンルー」

第一印象はおしとやか

しかし実は気に入らないこと（エッチな事）があるといつもヨシユアを蹴飛ばす乱暴者。

中国人とヨーロッパの方の人のハーフ、黒髪、黒眼

「鳴海桃華」

第一印象はゆるゆる

馬鹿でアホで天然で元気でいつも笑っているが、そうとうな寂しが

り屋。

渚の彼女、^{つもり}黒髪、片方が赤眼でもう片方が金色。

PSPの文字数制限の関係で続きは次回
それでは皆さんお元気で

FILE 6：ロシア東部奪回戦（1）（前書き）

やっと……やっと更新できました。

楽しみにしていて下さった方々、遅くなって申し訳ないです。

FILE 6：ロシア東部奪回戦（1）

「俺達は傭兵だ！それでも！全員が仲間で！家族だ！一人でも欠ければ皆が悲しむ！助け合い、支えあって生き延びてほしい！一人はみんなのために！みんなは一人のために！絶対死ぬんじゃないぞ！生きてまた会おう！」

アフリカでの大規模作戦のためこちらの中隊から人員が割かれ小隊規模になっても格納庫に響きわたるほどの歓声があがった。そんなムードの中最後に俺は付け加えた。

「死んだ奴は！葬式行っても泣いてやんないからな」

歓声は一気に笑いへ変わる。ホッとしたような顔で段を降りる俺にヨシユアとウェンルーが寄ってきた。

「なかなかやるじゃないか」

「凄かったわよ。」

口々に俺を誉め称える二人を黙らせ、ウェンルーにはみんなを分隊に分ける作業を与えた。

しかし、ウェンルーいわく押し付けらしい。なんだかんだ言いながらやってるから文句はない。

「ところでナギ、今日のもう一人はアレんじゃないのか？」

「ああ違うらしい、ガブラが連れてくるとか言ってたぞ」

俺とヨシユアとウェンルーは黒の災厄>ブラックデイズスター<と言うローレンス特別独立機動隊に所属していて今回のように大きな隊での行動時も独立した行動が許されている。

いつもなら三人に加えアレン・ライナードと言う人が加わるのだが、今日は新人を入れるとか何とからしい。

「おお！そこにいたか」

「ガブラー！」

手を振りながらやってきたガブラの横には一人の少年がついていた。

見たところ12、3歳って所か。

武器は・・・M4A1にM203グレネード、それとMP7A1。アサルトにサブマシンガンか、サイドアームズは・・・デザートイーグル！？

嘘だろ。俺でもしつかり構えなきゃ肩痛めるってのに構える暇もない戦場で使うなんて、馬鹿げてる。

「こいつの名前はセルゲイ、12歳だ、仲良くしてやれ」

セルゲイと言われた少年は俺の前まで来ると敬礼をしてヘリへ行こうとした。

「おいちよっと、何でサイドをデザートイーグルにしてるんだ？」

俺はどうしても気になったので聞くことにした

「あなたには関係ない」

セルゲイは振り向くとそう言い放ちへりに乗り込んだ。

「生意気な子ねえ」

後ろから少し怒ったウェンルーが帰ってきた。

「全員準備できたわ、既に出撃してる、それより何あの子？」

ガブラにもう少し詳しい説明を頼もうとしたが、既にガブラはいなかった。

しかたないから俺の分かる範囲で説明しといた。

「よし、俺たちも行くとしようか」

三人は一度目を会わせ、へりに乗り込んだ。
その様子を遠くから眺める陰が二つあった。
その片方が口を開いた。

「ボス、私たちは彼らを殺してるんじゃないでしょうか」

私は間違ってるような気がする。

私達はお金さえ積み重ねればどこへでも兵を送る。

・・・だけど、誰も傷つかずに戻ってきた事は一度もない。
戦場へ送る度に誰かが傷つく、私は何もできない。

「俺も同じ気持ちさ、でもあいつらはみんな戦争で何かを失った、
失い、ここで手に入れた、みんなそれを護ろうとしてるんだ」

彼らが戦うから生きて行ける。

傷ついて欲しくないのに、彼らが傷つくおかげで生きてる。

「皮肉ですね」

「今のご時世皮肉だらけさ、誰もが己が正義と信じて戦ってる」

「さて、毎度おなじみシヨウダウンタイムだ」

シヨウダウンタイムとは俺達が戦闘前にする武器の披露のことだ。

「まずは俺から」

ヨシユアが武器を入れた箱を開け、中身を取り出す。

「俺の武器はメインにミニミ軽機関銃、サブがUZI、サイドがH
& amp; KのUSP7だ、今回は基本的に支援に回る」

そう言うとヨシユアは武器を装備し始めた。

「私はベネリのM4とM4A1、サイドがご存知エボニー& amp; アイボリーよ」

ウェンルーのサイドは兵器開発部主任のエイリアス特製の2丁拳銃だ。

さらにただの拳銃ではなく限界まで連射性が上げられていて性能的にはマシンガンにも及ぶ。

まあこれを限界で扱うことはさすがのウェンルーにも無理だから宝の持ち腐れだが・・・

「俺はXM8とXM109ペイロードだ、でサイドがUSP9だ」

三人は言い終わると一斉にセルゲイをみた。

「僕にも言えと？」

セルゲイは少し不機嫌そうに言った。

「「「当たり前！」」」

三人の声が同時に響いた。

「僕の武器は見てのとおりM4A1とMP7A1です。サイドはデザートイーグル。以上です」

ウェンルーが俺と同じ事をセルゲイに聞いた。

「どうしてデザートイーグルなの？」

「僕の勝手でしょう」

やはりセルゲイの答えはそっけなかった。

「あのねえ、そっちに関係なくてもこっちにはあるの、戦場でそれ使って肩痛められたらこっちがたまったもんじゃないのよ」

「そうだぞ、もしお前が突然消えたりしたときにお前の性格とかを

知ってると便利だろ？」

「馬鹿やろう、それはねえだろ」

俺はヨシユアに軽く突っ込んでおいた。

セルゲイから返ってきた返事は怒気を含んでいた。

「これは、僕の戦いです」

何だこいつの眼、怒っている？ いや、違う、恐れている。

何なんだこいつは？

一応、見張っとくか。

渚はセルゲイと眼があつたので慌てて眼を反らした。

同時刻、ロシア東部のある町

「曹長！アレン・ライナード曹長！」

アレン・ライナードと呼ばれた男は装備の確認をしていた。

彼の武器はアサルトライフルのM4A1にコヨーテと呼ばれるショットガン。

コヨーテは普通のショットガンと違い、スコープを覗きロックした相手に向けて撃つと目標の手前で弾が散る仕組みになっている。

コヨーテを作ったのも兵器製造部のエイリアスだ。

「どうした？マル」

アレンは部下の名前は全て覚えているというすごい技の持ち主だ。

「今回の先遣隊に俺も行かせて下さい」

マルコは必死だった。彼の両親は帝国に殺された。
マルコは復讐のために軍に入ったのだ。

「駄目だ！」

「お願いします！」

マルコは諦めなかった。
諦める訳にはいかなかった。

「駄目だと言っているのだ」

「お願いします！本当をお願いします！」

「お前はまだ若い、先遣隊など死ぬ確率が高いだけだ、それなのに
何故？復讐か？」

マルコは俯いて言った

「復讐、確かに少しは思います。」

マルコは顔を上げ、続けた。

「でも、そのためじゃありません、捕虜に、妹が…妹がいるんです
！俺の、唯一の家族が！俺は妹を助きたいんです！」

マルコは決意に満ちた瞳で言い終えた。

アレンは装備の確認を終え、ハンヴィーに向かいながら言った。

「あのハンヴィー、銃座が空いてたな、ダンを行かせるから一人乗せないとな」

マルコは走ってアレンの側まで来た。

「そういうことなら、ここに一人います、行きましょう、曹長」

しばらくして二台のハンヴィーと二台の装甲車が町に入った。
途端に、降り注ぐ銃弾の嵐。

「九時の方向に敵多数！」

運転手が叫んだ。

「見りゃ分かる！」

マルコたちのハンヴィーの銃座にいるダンが言い返した。

「目的は捕虜の奪回だ！10分後に援軍が来るがそれまでに終わらせるぞ！ここで止まるな！」

鳴り響く銃声の中アレンの声が聞こえた。

「しかし、多すぎるぞ！」

銃座にいるダンルは備え付きのM60マシンガンを乱射しながら叫んだ。

マルコはダンルに向けて叫んだ。

「あそこの燃料タンクを狙って下さい！」

「おうよ！」

次の瞬間、ダンルはタンクに向けてM60マシンガンの引き金を引いた。

タンクを貫通する弾丸、それは中の可燃性の液体に引火し爆発を起こし付近の建物を破壊する。

元から崩れかけていた真横の建物は数十名の敵兵と共に崩れ落ち、横の建物とぶつかった。

右に曲がりまたも銃弾の嵐をつつきる。

「11時の方向にRPG！」

RPGとは携帯式対戦車グレネードランチャーの事、ローレンスの車両はRPG一発では沈まないがかなりの痛手にはなりうるため、出来れば食らいたくはない。

一軒家の二階から狙っている敵に一斉にマシンガンが浴びせられる。マシンガンに体中を打ち抜かれた敵は二階から落ちて死んだ。

マルコたちが目指している場所は町の中央にあるホテルだ。

そこにこの町の住人が捕虜として捕らえられている。

主な作戦は先遣隊でホテルと周辺の確保、その後援軍と共に捕虜を救出し、一時撤退。

さらにそのあとロシアの軍と協力し、ハバロフスクを目指すことになる。

ホテルに着いたマルコたちは正面と裏口に分かれて入った。
正面から入ったマルコたちはロビーで早速敵と遭遇していた。
マルコ達は植木鉢へカバーに入り、交戦していた。
銃声と硝酸の匂いの中マルコはどうすればこの状況を打開できるか
考えていた。

「いつまでここにいるつもりだよ！」

ダニルは植木鉢からM4A1をブラインドファイアで乱射しながら
訪ねた。

辺りを見回したマルコは警備室に目をやり一つ思いついた。

「曹長！」

マルコは思いついた案を実行できるか確認するためアレンに聞いた。

「なんだ！」

アレンは植木鉢から半身を乗り出し正確に敵を撃ち抜いていた。

「ここの照明の電源は警備室にあるんですか！」

「そうだが！それがどうした！」

マルコの考えは確実に実行できるようになった。

「俺が行って電源を落としてきます！レックスさん！暗くなったら
これ使って下さい！」

そう言つてマルコが投げ渡したのはナイトビジョン付きのアサルトスコープ。

「どうしてこんなん持つてんだ!？」

驚いているレックスにマルコは

「武器庫!」

とだけ言つた。

弾が尽きたマルコはリロードをして、アレンに援護を頼むと警備室目指して走り出した。

いきなりのことにアレンは少し驚いたがすぐに冷静になり援護を始めた。

「とにかく撃ちまくれ!威嚇し続けるんだ!」

アレンはM4A1を、ダンルはミニミ軽機関銃を、レックスはMP5をそれぞれ乱射している。

しかし敵はそれにも関わらず身を隠さずにマルコを狙っていた。

警備室へ行くには奴等の前を通らなければならず、確実にマルコは狙われていた。

怖え、すげえ怖い。

でもアレンさん達ならきつと大丈夫だ。

そう思っているマルコは足元に銃弾が当たろうと腕に掠ろうと足を止めなかった。

背中から最新のショットガン、ベネリ M9をとるとドアの鍵に向けて撃つた。

ドアを開けるためだけに作られたとも言える銃弾はドアノブごと鍵を壊し、そこへマルコが飛び込んだ。

すぐさまドアを閉め、バリケードを築くと、早速電源を探し始めた。

「どこだ、電源は？これか！」

「照明 ロビー」とかかれたボタンを押すと、すぐに電気が落ちた。外もまだ陽が昇っていないためロビーは暗闇に包まれた。

外ではレックスのMG6の独特の発砲音だけが響いていた。

MG6 スナイパーライフルは暗闇でもほとんど見えなくなるまでマズルフラッシュを無くし、連射までもを可能にした新型のスナイパーライフルだ。

銃声がる度に誰かが倒れていく。

しばらくして銃声が止み外へ出るとロビーの制圧は完了していた。

「マルコ！腕は大丈夫か？」

アレンは銃弾の掠った左腕を見ながら聞いた。

「ええ、大丈夫です、それより捕虜を助けに行きましょう」

マルコは早く妹に助けたくてウズウズしていた。

「捕虜がいるのは一番上の階のどこかだ」

アレンが言っているとダンルが笑いながら三階だがな、と付け加えた。

「ここの経営者に感謝しないとな、小さいホテルでありがとうって」

アレンはM4A1をリロードしながら答えた。
レックスは真面目にどうするか訪ねた。

「部屋は三つだがどうする？一つを制圧すればほかから増援が来る」

アレンは少し唸ると答えた。

「今こそこのカメラの出番だな」

そう言っアレンが取り出したのは最近エイリアスが発明した、小型の虫の形をした偵察カメラだ。

「こいつをダクトから各部屋に忍ばせて中の様子を確認する、捕虜がいる部屋には俺とマルコ、敵が多い部屋にはダンル、少ない方にはレックスだ、よし！いくぞ」

そう言っアレンは偵察カメラをダクトに放した。

三階に行き、偵察カメラの映像を確認し、各々が扉の前に着くとアレンが耳に付けている無線を使い、小声で言った。

「いいか、俺の合図で突撃だ、全員サーモビジョンは付けたか？」

「こちらダンル、いつでもいいぜ」

「レックスだ、早くしてくれ」

マルコはアレンと目が合うと頷いた。

「いくぞ、3、2……1 GO！」

マルコをのぞく三人が部屋に発煙筒を投げ込み、ダニルはミニミ軽機関銃を乱射、レックスもMP5で敵を撃ち抜く。

マルコはアレンが発煙筒を入れると同時に部屋へ突入し、敵を撃ち殺していた。

次に入ってきたアレンと共に部屋を制圧すると、入り口を守っている仲間に連絡をした。

「こちら先遣隊αチーム、捕虜を確保した」

「了解、βチームは？」

「ん、向こうも終わつたみたいだ」

アレンの視線の先には裏口から二階の制圧へ向かったβチームのメンバーがいた。

「こつちも終わったよ」

チームリーダーが言うとアレンはうなずき、司令部へ報告した。

「ホテルの制圧及び捕虜の救出、完了した」

「すぐに増援が着く、捕虜を乗せたら戻ってこい」

「了解」

無線を切ると隣にいるマルコに話しかけた。

「妹は？」

「無事でした」

そう言ったマルコの顔は喜びに溢れていた。

「それじゃみんなを連れて下へ行くぞ、すぐに増援が来る」

下へ降りたマルコ達は増援の装甲車に捕虜を乗せ、自分達は行きの車両に乗り込んだ。

アレンは面倒くさがるダンルを銃座に行かせると浮かれているマルコに言った。

「戦いはまだ終わってないぞ」

それを聞いたマルコははっとして気を引き締めた。

「分かっています」

アレンは最後に笑いながら付け加えた

「でも今は一端戻って休憩だ」

同時刻、町の北側

偵察に行ったローレンスの航空部隊スカイハイのヘリ「ミクリア」は不思議な機械を見つけたため、記録を取り司令部へ戻ろうとしていた。

「しかし、あれは何だったんだろうな？」

パイロットの一人がもう一人に尋ねた。

「いや、俺の方が聞きたいよ」

などと話していると、突然ミサイルアラートが鳴り響いた。

「な！何だ！」

「ミサイルだ！六時の方向！回避だ！回避しろ！」

パイロットは回避行動に移ったがその時は既に手遅れだった。

ミサイルが直撃し、爆発。

機体の半分を失ったミクリアはそのまま墜落していった。

FILE 6：ロシア東部奪回戦（1）（後書き）

今回は架空の武器を二つほど出しました。
それより何より展開がどうしても急になってしまいます。
どなたかアドバイスを頂けたら幸いです。

ユニークアクセス100突破！！

おめでとー

ありがとー

感謝の念よ

皆様に届けえ

FILE7：ロシア東部争奪戦（2）（前書き）

放置していてスイマセン

FILE7：ロシア東部争奪戦（2）

「村の入り口にスナイパーとミニガンがある、中央突破は難しそうだ」

双眼鏡を覗いたままヨシユアが言った。

「西側の崖は？」

俺はヨシユアに訪ねた。

「そっちからなら大丈夫そうだ」

俺たちが向かっている小さな村には敵の軍事情報が記録されたコンピュータがあるらしい。

今回の任務はその軍事情報の奪取、可能ならば敵の戦滅との事だ。

「俺が上まで行ってスナイパーとガンナーを殺る、お前等は後から来い」

「了解」

俺は彼らの側を離れ、崖へと向かった。

崖は少し勾配があり突起も多いので登るのは楽だった。

「さて、始めるか」

俺は肩に掛けておいたスナイパーライフルXM109を構えた。

息を止め狙いを定める。

……ピシッ！

サイレンサーをつけた銃口からは乾いた音とともに銃弾が放たれた。それは的確に屋上のスナイパーを撃ち抜く。

「一匹」

次はミニガンの射手に狙いを定め引き金を引く。

「こちら渚、始末した、進んでいいぞ」

「了解」

ヨシユアたちが村の入り口へと進む。

「右側の白い建物に集合だ」

俺はXM109を肩に掛け、アサルトライフルXM8を持った。

FILE7：ロシア東部争奪戦（2）（後書き）

PSPの字数制限で一話500字未満になってしまいました。
ご了承ください。

FILE 8：ロシア東部争奪戦（3）

身を低くしたまま駆けていく。

常に周囲を気にしながら走るのは以外とキツイ。

白い建物に到着した俺は呼吸を整えてから話し始めた。

「ヨシユア、敵は？」

「まだ気づいてないぜ、どうする？」

「二手に分かれていこう、俺とセルゲイ、ヨシユアとウエンだ」

「あの建物でしょ？どうやって入るの？」

ウエンルーの質問に俺は笑って答えた。

「ドアごと吹っ飛ばせ」

目的の建物についた俺は裏口に向かい爆薬を設置した。
セルゲイをみると今来た道にクレイモアを仕掛けていた。

「配置についたか？」

俺は無線でウエンルーに聞いた。

「こちらウエンルー、いいわよ」

俺はその声を聞きドアに設置した爆薬を確認した。

「セルゲイ、爆破したら」

俺は言いかけたがセルゲイはそれを遮り不愛想に言った。

「分かってます」

全く、愛想のない奴だ。

「なら行くぞ、3、2、1、爆破！」

小規模の爆発が二カ所で起こり、ドアが吹き飛んだ。

FILE 9：ロシア東部争奪戦（4）

ドアが吹き飛ぶと同時に俺とセルゲイは部屋の中へ銃を向けた。中には三人の敵がいて、一人はナイフを持ち俺に襲いかかってきた。残りの窓から逃げている方はセルゲイに任せ、襲ってきた奴のナイフを銃身で受け流し、そのまま顔にひじ鉄を食らわせた。最後に頭を打ち抜き銃をおろした。一息つくともシユアから無線が来た。

「こちらヨシユア、今から二階に向かう」

「分かった、俺たちは地下に行く」

セルゲイにいくぞ、と声をかけ地下へいくために階段へ向かった。階段へ向かいながらリロードをした。

「おかしい」

不意にセルゲイがつぶやいた。

「どうした？」

「静かすぎます、増援がくる気配がない」

それはちょうど俺も思っていたことだった。

「俺も思ってたとこだ、何かあるのかもな」

階段を降り地下の部屋へむかう。

今来た方を俺がカバーし、セルゲイが爆薬を仕掛ける。

「設置しました」

爆発しドアが吹き飛ぶ。

同じように敵を始末する。

ただ違うのは一人だけ生かしておいたことだ。

「さて、あんたを生かしておいたのは聞きたいことがあるからだ」

俺は生かした敵をイスに縛り付け質問した。

FILE 10：ロシア東部争奪戦（5）

「ここには何がある？」

俺が聞くと奴は笑いながら

「研究所さ、奴等が目覚めるのさ！」

そついうと突然口から泡を吹いて死んだ。

死んだ死体をみると顔は醜く腫れ、歪んでいた。

「死んだ」

セルゲイがそつけなく言う。

「ああ、おそらく帝国の開発した自殺キットの類だろう」

捕まるぐらいなら死を選べってか、いかにも帝国がしそうなことだ。

「行きましょう、時間の無駄です」

「ああ」

「ホストコンピュータに接続完了、データのダウンロードを開始する」

1 / 1276

ダウンロードが始まる。

セルゲイとヨシユアは正面を、ウェンルーは裏口を、俺は二階からそれぞれ守備していた。

しかしあいつの言葉、奴等が目覚めるって、誰のことだ？

俺が考えにはいるとすぐに300メートルほど先で地面が爆発し、円形にえぐれた。

「何！どうしたの？」

裏口にいるウェンルーには爆発の音と揺れだけしか伝わっていないらしい。

「約300メートル先で地面が爆発した、ヨシユア！そっちで確認できるか？」

俺は今の爆発でできた穴を見続けながら聞いた。

「ああ、ばつちり見える、ありやなんだ？」

FILE 11：ロシア東部争奪戦（6）

俺は双眼鏡で穴を覗こうとしたが、さっきの爆発で舞い上がった砂のせいで見えなかった。

「穴から何かでてきました」

セルゲイが少し緊張した声で言う。

「あれは、人だな」

俺がそう思うと、真横を銃弾がかすめた。次の瞬間、銃弾の嵐がやってきた。

「おい！撃ってきたぞ！」

ヨシユアがキレ気味に叫ぶ。

「撃ち返せ！しかたない！」

そう言つてスコープを覗き狙いを定める。

動いてる敵へのヘッドショットはかなりの技術を要するため胴体を狙う。

引き金を引くと銃口から弾丸が放たれる。

放たれた弾丸は敵の胴体を貫通した。

だが、撃たれた敵は何もなかったかのように前進し続けている。再びヨシユアの声がある。

「こいつら撃つても撃つても死なねえぞ！」

すでに敵は50メートルまでに迫っていた。

「頭を狙えば殺れます」

セルゲイの言葉通り頭を撃てば死ぬようだ。

逆に言えば頭以外ならどこを撃たれても死なない。

俺は愚痴った。

「クソッ、カプコンのゾンビゲームかよ」

569 / 1276

FILE 12：ロシア東部争奪戦（7）

「ダウンロードはまだか！」

俺は無線に叫んだ。

「半分終わってます！後三分ほど！」

セルゲイはそう言つとM4A1に取り付けてあるM203グレネードランチャーを放った。

放物線を描いたそれは地面にぶつかりと爆発し周りの敵を吹き飛ばした。

「もう一発いきます！」

セルゲイはグレネードランチャーの弾を装填するとさっきと同じように放った。

「正面右手から敵！」

俺は叫ぶとXM108スナイパーライフルと分隊支援火器のミニミ軽機関銃を持ち換え、

新たにきた敵に向けて薙払うように撃ち続けた。

「こっち側はふつうの人間だ！」

無線に叫ぶと背後に気配を感じ振り向いた。

そこにはナイフを持ち突っ込んでくる敵がいた。

「うおっ！」

俺は体勢を崩しながらもその一撃を銃身で防ぎ、反撃にしようとした。

ナイフをはじくと敵のこめかみを銃弾が貫通した。

「大丈夫？」

横を向くと地下から上ってきたウェンルーがいた。

「助かった」

俺は立ち上がるとXM8アサルトライフルを構え再び外の敵を撃ち始めた。

「ダウンロード終わりました！」

無線にうれしい知らせが届いた。

FILE 13：ロシア東部争奪戦（8）

「よし、桃華！ダウンロードが終わった！LZまでへり頼む！」

本部にいる桃華に連絡すると既に向かっているとのことだった。

「全員地下から逃げるぞ！フラッシュバンを使い！」

俺はウエンルーと共に地下へ向かった。

地下の敵をフラッシュバンを使い始末するとセルゲイとヨシユアが合流した。

「ここからLZまでは約300m、弾の浪費を気にするな、牽制しながらつつきるぞ」

全員がリロードしたのを確認すると俺はカウントを開始した。

「フラッシュバンと同時に行く、3・2・1・GO」

フラッシュバンが炸裂し、目を眩ませた敵を撃ち倒しながら走る。

銃声。

怒号。

走り去る靴音。

様々な音が飛び交う。

「ぐっ！」

横でヨシユアが撃たれた。

「ヨシユアが撃たれた！足だ！」

俺はXM8に付いているグレネードを放ち、ヨシユアのもとへ滑り込んだ。

「大丈夫か！？」

ヨシユアの周りには血が流れていた。

「うつつ、足と肩、かすっただけだ」

俺はヨシユアの首元を持ち、引きずった。

ヨシユアがUZIを乱射する。

後ろからは帝国兵の銃弾が迫る。

いくつもの銃弾がかすり、痛みを増やしていく。

FILE 13：ロシア東部争奪戦（8）（後書き）

よしゆあ の 軍事略語解説

よしゆあ：このコーナーでは俺が軍事略語について解説していくぜ！
うえんるー（以下うえん）：あんた本編じゃ引きずられてたけどな
よしゆあ：俺だって好きで引きずられてた訳じゃねーよ！

うえん：まあいいわ、とりあえずきょうはLZね、これはLand
ing Zone 上陸地帯って意味よ、脱出の時にヘリなどが着
陸する場所のことね。

よしゆあ：へえ、そうだったのか

うえん：あんた知らなかったの……今度から私の名前をタイ
トルにしましょう。

よしゆあ の 軍事略語解説 終

よしゆあ：それはだめえええ！

FILE 14：ロシア東部争奪戦（9）

「早くこつちだ！」

前から回収部隊が援護に来た。

ヨシユアを引きずり銃弾がかすめながら、やっとの思いでへりに乗り込むと緊張からの解放と痛みで意識が薄くなってきた。
いくつもの考えが頭の中を駆け巡る。

死ぬ。

ダメだ。

限界。

頑張れ。

無理。

やれる。

ごめん。

まだ終われない。

あきらめろ。

あきらめるな。

桃華。

会いたい。

思いの全てが頭の中でリピートされる。

俺の意識はそこで途切れた。

近づきたくても近づけたくないあいつの顔を思い浮かべながら。

FILE 15 : 捕虜 (1) (前書き)

久々の前書き

何を書こうか？

読んでね (^ | ^ ;)

FILE 15：捕虜（1）

「ははは、馬鹿野郎こつちだよ」

外ではダンルが部下相手にバスケットをしていた。

それをみながらマルコは銃弾かすめた腕を治療してもらっていた。

「そっぴやスカイハイのミクリアが1機落とされたらしい」

腕を治療していた衛生兵が話しかけてきた。

「上の話じゃ一人が捕虜にとられてここに連れてこられたらしい、恐らく助けにいくだろうな」

マルコはその話を聞き、治療が終わるとすぐさま武器を準備し始めた。

M4A1アサルトライフル

Mini Uzi

Mk.23 MOD0

破片手榴弾

準備を終えたマルコは水筒に水を汲みに行った。

「レックスさん」

給水車の前には水を汲んでいるレックスがいた。

「よお、マルコどうした？」

レックスは水筒に水を汲み終わると蓋をした。

「ミクリアが落とされて一人捕虜にされたらしいです」

マルコは自分の水筒に水を汲みながら言った。

「ああ、聞いたよ、恐らく出るだろう」

レックスは神妙な面もちで武器の準備をしてくる、と告げると行つてしまった。

何かあったのだろうか？

マルコは少し考えたが気にしないことにした。

この先起こる戦闘が悲惨なことになるとも知らず。

FILE 15：捕虜（1）（後書き）

ゆ、ゆ、ゆ、ユニークアクセス900突破！

パパパパーン！

パ！パ！パ！パーン！（運命のリズムで）

なぜ1000じゃないかって？

それまで待てません！

嬉しいのです！

僕は全力の六割で嬉しいのです！

お便り、感想まってまゝす！

じゃんじゃん送ってね！

送ってくれなきゃ……………ね？

FILE 16：捕虜（2）（前書き）

僕は嬉しいです。

四月から執筆を初めて今月PVアクセスが10000を突破したから

FILE 16：捕虜（2）

郊外の道をストライカーと歩兵部隊が進んでゆく。
左右に立ち並んだ民家から敵兵が出てくる。

「ストライカーを守れ！RPGの的にさせるな！」

アレンが叫ぶ。

「一時の方向！民家二階にRPG！」

その声が聞こえるとほぼ同時にマルコはそこへ銃口を向けていた。
M4A1を構えトリガーを引く。

するとハンマーが落ち、ファイアリング・ピンを押し出す。

カートリッジ底部の雷管が叩かれ薬莢内の火薬が急速に燃焼、その
燃焼ガスにより弾丸が押し出され、銃口から飛び出す。

弾丸は対象へと向い着弾。

頭を打ち抜かれた敵の兵士はあらぬ方向へRPGを撃ち、息絶えた。

「赤外線レーザーでストライカーに射撃指示をしろ！」

アレンがマルコに向けて叫ぶとマルコはすぐさま銃身の側面についている赤外線レーザーを点けた。

左側の民家に向けてそれを照射するとストライカーの上部についた
7.62mm機関銃M240が弾丸を吐き出す。

体中を打ち抜かれた兵士たちは次々と倒れていった。

マルコは右側の民家のガレージに隠れると空になった弾装を捨て新たな弾装を装備した。

ダンルと共に崩れかけた塀に隠れて隣の民家の敵を倒す。

「手榴弾いきます！」

マルコは叫ぶと手榴弾を投げ込んだ。

爆発した破片手榴弾は敵兵を殺し、それと同時にマルコとダンルは塀を乗り越え次の民家へと向かう。

玄関前に駐車されている車に隠れ向いの敵に銃弾を見舞う。

ガレージの中でまとまっている的にM4A1の銃身下部に取り付けているグレネードを放った。

爆音と血飛沫があたりを支配する。

FILE 16：捕虜（2）（後書き）

この小説を読んでいて某戦争FPSゲーム「コー。オブデューティ」を思い出すがた、居ましたらコメント下さい。

それと狂気更新（二日に一話）を希望するかたはコメントに感想と一緒に送って下さい。

10人以上の希望でやります！

可能な限り、笑

FILE 17：捕虜（3）（前書き）

更新頻度が少ない割に文章が短い。

カスだ。

僕はもう……

FILE 17：捕虜（3）

ダンルがRPD軽機関銃を乱射する。

ダンルの制圧射撃で空になった民家へ滑り込むように隠れる。

左斜め前には本来一階のあるべき場所がガレージになっていて、二階の位置に玄関のある豪邸が建っていた。

マルコはそこへ向け赤外線レーザーを照射する。

ストライカーの7.62mm弾がばらまかれ、玄関近くにいた敵は壁越しにでも撃ち抜かれた。

ある程度的を片づけた後、アレン、マルコを含む四人とレックス、ダンルを含む四人に分かれて豪邸へと突入した。

ガレージから突入したマルコ達は上へと続く階段の下でアレンの話を聞いていた。

「いいか？ここを制圧したら裏から出て敵の対空砲を破壊する！そうすればヘリ呼んで帰りが楽になるぞ」

アレンの話に少し笑った後、再び気を引き締めて階段を上がる。

残りの数段を一気に駆け上がり、マルコと他の隊員でそれぞれ左右をカバーする。

敵が居ないことを確認すると次は書斎へと向かった。

ベネリM9を持った仲間が書斎のドアをあけるとドアの横、ちょうど死角になるような所に隠れていた敵がM16アサルトライフルを

撃ってきた。

きしむドア

鳴り響く銃声

飛び散る血飛沫

仲間を貫いた弾丸は壁にめり込み停止した。

FILE 17：捕虜（3）（後書き）

さ〜ど座談会

ナギ「さあ始めました、新コーナー！」

作者「このコーナーでは作者がぶっちゃけ裏話を登場人物と語ります」

マルコ「毎回誰がでるかは分かりません、作者は絶対ですが」

ヨシユア「そんな記念すべき一回目の内容は！」

ヨシユアの性格って何！？〜

マルコ「ヨシユアって確か極度の心配症じゃ？」

ナギ「ああと、それはまあ、いろいろあって没になったんだ」

作者「そう、色々あったんだ、心中察してくれ」

マルコ「直せば？」

作者「PSPだと500文字越えた文は消えるから、初期の話の手直しは現状無理なんだ」

ヨシユア「作者面倒なんだ…」

ドガッ！バキッ！ドゴーン！

作者魔法の効果音

作者「ヨシユア君？何か言ったかい？」

ヨシユア「いえ、なにも……………」

マルコ「は……………」

ナギ「そんなわけで今回はここまで」

みんな「次回もよろしく！」

FILE 18：捕虜（4）（前書き）

PCが欲しい、それさえあれば……

たのしんでね

FILE 18：捕虜（4）

マルコは仲間が倒れるよりも早く敵を撃ち、アレンは撃たれた仲間を支え、呼びかけた。

「おい！大丈夫か！しっかりしろ！」

撃たれた隊員は荒い息づかいで答えた。

「妻に…妻に伝えてください…はあ…自分は…立派に戦ったと…」

そう言い残し、隊員は目を閉じた。

「馬鹿野郎！自分で伝えろ！生きてその口で伝えろ！」

アレンの必死の呼びかけは、しかし届くことはなかった。

「ミラー・J・ハリス上等兵、K I A」

アレンが沈んだ声で無線に呟く。

すぐにダネル達が合流した。

「ボブとフォーリーでミラーをストライカーまで運び、いったん司令部まで戻れ、思った以上に敵の攻撃が激しい、増援と一緒に来てくれ」

二人がミラーを担架に乗せて運ぶのを手伝い再び屋内へと戻った。

「プールの横の植え込みから対空砲の砲主を撃つ、行くぞ！」

感傷に浸っている暇はない。

すぐさま目つきを変え指示を出すアレ、それに答えるように三人は歩を進めた。

帝国の最新式対空砲、3連装50cm+500cm対空砲「ヨハネ」は一分間に四千発撃てる50cm対空機関砲2門と指向式近接信管搭載の500cm高射砲が一門ついている。

FILE 18：捕虜（4）（後書き）

「うえんるーの軍事略語解説」

うえん「さあ私の出番ね」

よしゅあ「待ってくれ！俺のコーナーだったはず！」

うえん「馬鹿はほつといて、今回はK I Aについてね」

よしゅあ「それならわかるぞ！」

うえん「じゃ、言ってみなさい」

よしゅあ「Kかなり 大きいI Aあの子の胸」

ドガッ！バギッ！バン！バン！ボキッ！

うえんるーインファイトの効果音

うえん「はあ、はあ、無理矢理下ネタに繋げるんじゃないわよ！K I Aはキル イン アクシヨンの略で戦闘中などに死亡が確認された場合に使われるわ、できれば使いたくない言葉ね」

よしゅあ「ヨ……シユア…… K I A」

「うえんるーの軍事略語解説 終」

よしゅあ「……って！まだ死なん！」

FILE 19：捕虜（5）（前書き）

最近、読者が増えてきてうれしい

FILE 19：捕虜（5）

厄介なのは500cm高射砲。

これには最新の指向式近接信管が搭載されていて目標の近くで爆破すると中から大型の破片が目標へ向けて射出される。

この破片は目標が360°。どこにいてもその方向へと射出されるため、近くで爆発されるとヘリだとまず助からない、戦闘機でも高確率で落とされるためこいつがある所にほいほい空から攻めることはできない。

故に地上から侵攻しこれを破壊しなければならない。

レックスがPSG-1を構えスコープをのぞき込む。

PSG-1はセミオートスナイパーライフルだ。

それを対空砲の砲主へと照準をあわせ引き金に指をかける。

隣で見守っていたマルコは驚いていた。

どう考えてもここから砲主までは900m近くはある。

マルコは一度スナイパーライフルの射撃訓練を受けたことがあるが、500mが限界だった。

「俺たちが100m地点に着いたら後ろ側の三人をやってくれ」

アレンは言いながらヨハネを指さした。

ヨハネの周りには敵兵が5人いたが、都合のいいことにこちら側を全く警戒していない。

好機を逃さないためにも今すぐ動き出さなければならなかった。

「身を低くしろ、極力ばれないように……行くぞ！」

FILE 19：捕虜（5）（後書き）

さーど座談会

ヨシユア「さーど座談会のコーナーだよ？」

ウエン「なぜ疑問系！？」

渚「今回のテーマはこちら」

「作者とみんなの好きな武器は？」

作者「マシンガン！特に重！軽でもいいけどとにかくあのボアーツ！てやるのがいいんだ！」

渚「俺はスナイパーだな、気づかれる前にやっちまうんだ、一方的に」

ヨシユア「スナイパー以外なら何でもいいぜ、細かいのは苦手だ」

マルコ「アサルトライフルです、やっぱり万能に」

ヨシユア「つるぺたウェンルーは？」

ウエン「シヨットガン、グレネードランチャー、ロケットランチャー……ふふふ」

FILE 20：捕虜（6）

木々の間を縫うように進む。

敵はまだこちらに気づいていない。

ちょうど100mほどの地点。

アレンが無線でレックスに合図を出した。

直後、5秒もかからず3人の敵が倒れる。

それと同時にマルコたちは駆けだし、残りの二人と砲主を始末した。

「レックス、急いでこっちまで来い、マルコ！C4セットしろ！」

無線からレックスの悪態が聞こえてきたがアレンは無視して指示を出した。

マルコはバックパックからC4を取り出すとヨハネにセットした。

「設置完了！爆破します、離れてください！」

アレンとレックスが離れたことを確認するとマルコも離れ、スイッチを押した。

爆破音がなり、ヨハネの残骸が飛び散る。

辛うじてヨハネと分かるぐらいのその向こうには道があった。

「これを辿っていけば敵陣の裏に出る、もうすぐストライカーが来るはずだから合流してこのまま裏から攻める」

アレンが話し終わると同時に左側にストライカーと5人ほどの分隊が見え、後ろからは息を切らしたレックスがやってきた。

「アレンお前、キツイぞこれ」

呼吸を整えながら文句を言っレックスにアレンはそうか、とだけ返した。

FILE20：捕虜（6）（後書き）

さーど座談会

桃華「人気投票一位だよ！」

作者「三人が回答してな」

桃華「あーあー、桃は何にも聞こえませえん」

作者「まあこいつが今後どうなるか楽しみだ」

桃華「桃の一位は不動です！」

作者「ふ、そんなもの作者パワーでどうとでも……」

桃華「あん……」

作者「や、やめろ！そんな格好でそんな声を出すな！」

桃華「おいで」

作者「やめろおお！イメージをくずすなああああ！」

桃華「逃げちゃった……とにかく、これからよろしくです、また次週ね」

FILE 21：捕虜（7）

「アレンさん、僕らの目的は人質の奪還ですよね」

マルコは水を飲んでいるアレンに訪ねた。

「ん、そうだ、仲間を助けることが最優先だ、他は後回しでもいい、とにかく救い出せ」

アレンは水筒の蓋を閉め、銃の状態をチェックし、ストライカーが来たことを確認するといくぞ、と声を掛けた。
作戦はシンプルだった。

表から陽動部隊を送り込み、敵がそちらに集中している隙に裏側から壁を爆破し、捕虜を救出、その後へりにて脱出、それだけだ。
それだけのはずだった。

誰もが無言で進んでいく。

しかし、その場にいる全員が感じていた。
ねつとりとするような嫌な空気を。

「アレンさん……」

「分かっている」

アレンはマルコが言い終える前に遮っていた。

「嫌な予感がする、恐らくこの場にいる全員が気づいてる」

マルコは嫌な汗を浮かべていた。

この先で何かがある、それは確かだ。

しかし、何が起こるかなどそれこそ誰も知ることはなかった。

同時刻、帝国軍キャンプ

「君には助かって貰わねば困るのだよ」

口元に黒いマスクをした男が捕虜の耳元で囁き、注射器を手にした。

「さあ、君の出番だよ」

黒マスクの男はつぶやき捕虜へ注射をした。

FILE 21：捕虜（7）（後書き）

さーど座談会

ガブラ「今回でさーど座談会も……何回だ？」

クリア「それぐらい覚えておいて下さい」

ガブラ「実はクリアも覚えてないんじゃない？」

クリア「……………」

ガブラ「お互い様だ、調べに行こう」

クリア「……………」

ガブラ「ん？どうした？」

クリア「……ボス、肩を組まないで下さい、セクハラです」

ガブラ「え、まで、これだけで！？いや、俺が悪かった！俺が悪かったからウェンルーにだけは言わないで下さい！」

クリア「……ケーキ」

ガブラ「了解！行ってきます！」

作者「俺の出番……………」

FILE22：捕虜（8）（前書き）

これ、一気に投稿しなきゃ読みづらいことに気づきました。

FILE 22：捕虜（8）

塀に囲まれた場所にその帝国のキャンプはあった。

出入口は2カ所正面と左側だけだ。

しかし、マルコ達はそのどちら也使わず裏から塀を破壊し進入していた。

帝国兵はいない。

故に見つかる心配もない。

音を立てても誰も反応しない。

誰もいない。

「もぬけの殻？」

レックスは呟いた。

右を見ても左を見てもあるのはテントだけ。

マルコ達は首を傾げていた。

一つずつしらみつぶしにテントを見ていく。

しばらくテントをめくる音だけが聞こえた後、マルコが声をあげた。

「いました！生きてます！」

マルコの視線の先には両手を縛られ目隠しと猿ぐつわを噛まされた女性がいた。

女性の背はそれほど高くなく、髪は赤色だった。

「捕虜の女性を確保！目立った外傷はありません！」

マルコはすぐに彼女を解放すると歩けますか、と尋ねた。

「私を嘗めないで頂戴、武器を」

彼女の言葉に驚きつつも自分の持っていたMini Uziと弾装を渡した。

「こちらです！着いてきて下さい！」

マルコは彼女を先導するとアレん達の元へ急いだ。

アレん達はすでに陽動部隊と合流し、事情を説明していた。そこへ、二人が走ってきた。

FILE 23：捕虜（9）

アレン達の元へと走っていくマルコ。捕虜だった女性は力強く進んでいく。

「ミラ！」

二人に気づいたレックスがマルコ達の方へと走ってきて、ミラと呼ばれた女性と抱き合った。

「よかった、無事だったんだな、怪我は？」

ミラは涙ぐみながらも答えた。

「ああレックス、助けに来てくれたのね、ありがとう」

それから大丈夫、とつけ加えるとレックスに守られるようにストライカーに乗り、基地へと引き返した。

その様子をただばかと口を開けてみていたのはマルコだけだった。アレンはしきりにうなずき、ボブとフォーリーは互いに笑いあい、ダニルにいたっては号泣していた。

「ど、どういうこと？」

マルコがダニルに訪ねるとダニルは涙ながらに語ってくれた。

「あいつら婚約してんだよ、この戦いが終わったら結婚するらしい、ミラが捕まったって聞いたときは一人でも助けに行くって聞かなくてよ、うん、無事で良かったぜ」

話している内にさらに感動して泣いてしまった。

「はは、ダンルさん……、ところでアレンさん帰りのへりは？」

アレンは聞かれたとたんバツの悪そうな顔をしながら振り向いて言い放った。

「こない……」

「……………」

FILE 24：捕虜（10）

「こない……」

「……………！！！！！！」

マルコ、ダンルそれにボブとフォーリーはしばらく沈黙した後びつくりマークを6個浮かべた。

「あ、あれですよ、ジープかトラックが来るんですよ！」

マルコの言葉は再びアレンの「こない」に踏みつぶされた。

「え？じゃあ歩いて帰れと？ここから基地まで5 km以上の道のりを歩いて帰れと？」

ダンルは泣いていた。

別の意味で。

「歩くことは健康にいいぞ」

アレンも泣きながら答えた。

周りを見渡すとフォーリーが立ったまま昇天していたので、かなり強引な手段で連れ戻し、基地へと歩み始めた。

東京ドーム程の広さの空間には5 mほどの鉄の固まり、二つの脚と二つの腕で人型に近い、物が5台置かれていた。その中の左端、大型のアサルトライフルBAR9を持った機体に男が上っていった。

コクピットに座り、ボタンを押す。閉じるハッチ。

上半身がやや起きあがり、カメラアイが赤く光った。

FILE24：捕虜（10）（後書き）

さーど座談会

レックス「なあミラ、今度どこかへ遊びに行こうか」

ミラ「ええ、行きましょう!」

作者「それならことかどうだ?」

ミラ「うつさいわねえ、あんたは黙ってて!」

作者「えええ……」

レックス「こら、作者様にそんなこと言っではいけないだろ」

ミラ「はあい、ごめんなさいレックス」

レックス「作者様にも謝って」

ミラ「作者さん、ミジンコみたいな存在なのに人として扱ってすいません」

レックス「よし、よく言えたな」

作者「までええい!おかしい!おかしすぎる!今まで一度も言われたことのない悪口を言われたぞ!」

ミラ「じゃ、今回はこの辺で」

FILE 25 : 決意と懇願 (1) (前書き)

最近執筆が進まないWWW

FILE 25：決意と懇願（1）

目を開けると見慣れた天井があつた。

三十畳ほどの部屋。

俺は多少の痛みは無視してベットから降りた。

そのまま全身の状態を確認し、自分が思いの他重傷だったことを知る。

左腕は動かすと痛み、右手の人差し指も折れていた。

キッチンから具を切る音が聞こえてきたから、そっちへ向かった。

「あ、ナギ！だめだよ、まだ寝てなきゃ」

俺は桃華を見た途端、罪悪感に苛まれた。

こいつは俺のことをこんなに心配してくれてるのに俺は何だ？

桃華の事を何一つわかっていないじゃないか！

「桃華、ごめん」

気づけば謝っていた。

何が変わるわけでも、何かが分かるわけでもないのに。

もつと他に言わなきゃいけないことがある、そんなことは分かっていた。

言わなきゃ、聞かなきゃ、桃華に辛い思いをさせたくない。

「ナギ？どうしたの？具合でも悪いの？無理しちゃだめだよ、ちゃんと休んでなきゃ」

桃華の目を見た。

赤く腫れていて、泣いていたことがすぐ分かる。

きつと桃華のことだ、俺が戻ってきてからずっとつききりだったのだろう。

「なあ桃華、話が…あるんだ」

桃華は不安気な顔で俺を見てきた。

「俺達……………」

FILE 26 : 決意と懇願 (2) (前書き)

らぶらぶさせたかったorz

FILE 26：決意と懇願（2）

「俺達…こんな関係終わりにしよう」

「え……………」

もう、桃華にこんな思いはさせたくない。

「こんな中途半端な関係終わりにしよう」

「えっ、あっ、ちゃんと、っ、付き合おうって、こと…………だよね？」

桃華は今にも泣きそうな不安気な顔で聞いてきた。

「俺よりいい男なんていくらでもいる」

「嘘だよねっ！？いくらナギでもその冗談はひどいよ」

「嘘じゃない！俺はいつ死ぬかさえ分からないんだ！そんな奴よりもっとまともに働いてる奴探せよ」

桃華はシヨックでその場に座り込んだ。

俺は顔を背けて別れを告げると玄関へ向かった。

ちよつと靴をはいたとき、後ろから桃華がしがみついていた。

「やだよ！ナギ行かないで！お願い、何でもするから！桃、毎日ご飯作ってあげるし、夜もがんばるから！何でもしていいから側にいて！」

桃華の願いよりも悲痛な叫びに近かったそれを無視し、小さくゴメンと呟いた。

桃華を振り解き、逃げるようにその場を去る。

ごめん、幸せになれよ、ただひたすらにそれだけを願い続け走った。体の痛みも今は気にならない。

周りなんて見えてなかった。

何度も、何度も人にぶつかりながら走った。

ただ走っただけだ。

FILE27: RAN(1) (前書き)

初めてのメール執筆。

一話が長くなると執筆に時間がかかるorz

FILE 27 : RAN (1)

走っていた。

桃華と出会った時の事を思い出しながら。

「君が鳴海桃華ちゃん？」

あの時、八歳だった俺は両親を失ったショックから立ち直ったばかりだった。

ガブラに引き取られ色々と面倒を見てもらい子供ながらも何か恩返しをしないと申し出た。

その時頼まれたのが孤児院の子供達の遊び相手になってあげることだった。

その孤児院に遊びに行き始めてから一週間、俺は昔から人付き合いが上手かったためその孤児院のほとんどの人と友達になった。

そして、その時にヨシユアとウエンルーに知り合った。

孤児院の子供達の中でもその二人と一番仲が良くなった。

ウエンルーは昔から男勝りな性格で怖れられていたし、ヨシユアはパツとしない奴だった。

俺達が10歳のある日、思い付いたかのようにヨシユアが話しはじめた。

「なあ、鳴海って奴知ってるか？」

「確か二ヶ月くらい前に来た人だよね」

そつえば院長がそんな事を言っていたな。
ん、でも会った覚えがないぞ。

「そう、その人まだ部屋から出てきた事がないらしいよ」

そうなんだ。だから会ったことが無かったんだ。

今いる中庭からはその子の部屋が見えた。カーテンが閉められていて中の様子は分からない。まるでそこだけ別世界のようなだった。

「なんで出て来ないんだろうね」

ウェンルーが心配そうな顔をするがヨシユアは俺に聞くな、と言いつ話を打ち切った。

その間も俺はあの部屋を見ていた。

一陣の風が吹きそれに目を細めた時。誰かの手によりカーテンが少し開かれ、こちらを見つめる顔が見えた。
気がした。

「どうした渚？なんかあったか？」

今、いた・・・よな。きのせいかな？まあいいか。

「おいってば！渚！」

「あ・・・ああ、ごめん、何？」

「ずっと上ばつかみてどうしたんだ？」

「今・・・いや、なんでもない」

次の日、俺は院長に呼ばれていた。

院長の部屋に入ると顔にガーゼを貼り、所々怪我をした初老の男性がいた。

彼の傷は別に昔からあるわけではなく、最近できたものだった。

「おお、よく来たな、まあ座りなさい」

院長は俺が椅子に座るのを見ると頬のガーゼに手をあてながら話しはじめた。

FILE 27 : RAN (1) (後書き)

さーど座談会

作者「ファンタジー作ろうと思うんだ」

クリア「無駄です」

作者「そんな言い切らなくても…」

クリア「一作品で手一杯なあなたに書けるはずありません」

作者「でももう設定とかあるし……」

クリア「無駄です」

作者「面白そうだし…」

クリア「無駄です」

作者「でも……」

クリア「無駄です」

作者「もついいや」

クリア「それでは今回はこの辺で、失礼いたします」

作者「絶対書いてやる」

FILE28:RAN(2)(前書き)

更新おせえーな！。

誰か殴り倒して下さい。

FILE 28 : RAN (2)

「鳴海という子を知っておるか？」

「二ヶ月前に来た子でしたっけ」

「そうだ、あの子の事で頼みたい事があるのだ」

何だろう。俺に頼みたい事？

「あの子がどうしてここに来たかは分かるな？」

ここに来る人の理由なんて両親がいなくなつたか捨てられたかのどちらかだ。

「はい、なんとなくですが」

「彼女は両親を目の前で殺されてな、それも無惨にだ」

そういえばヨシユアが部屋から出てこないって言ってたな。

「それで部屋から出てこないと」

「そうじゃ、それで頼みたいことなんだが…」

「その鳴海っていう子の心を開いてほしって事ですな」

「話が早くて助かるの、頼まれてくれるか？」

「分かりました、頑張ってみます、あの！院長！」

俺は部屋の奥に行こうとした院長を呼び止めて、恐る恐る聞いてみた。

「あの、その顔の傷は？」

院長は頬の傷にそっと触れると悲しそうな顔をした。

「あの子の心はひどく傷ついておる、老いばれにはどうにも出来なかったのじゃよ」

それだけ言うと院長は奥へと歩いて行ってしまった。

「うーん、なんとなく予想はつくけど……」

それが当たらないことを祈ろう。

いや、むしろ外れる事を。

その後、職員の人からその子の部屋の鍵を受け取り、部屋へ向かった。

部屋へ向かいながら、俺はどうやって立ち直らせようか考えた。

「何かプレゼントするかな、食べ物、いや物じゃだめかもな」

そっこうしてる内にいつの間にか鳴海の部屋の前まで来ていた。

「まあ、とりあえず会ってから考えるかな」

ドアをノックするが返事どころか物音さえしない。

俺は仕方なくもらった鍵を使い、部屋の中へと踏み入れた。

特にこれといった特徴のない部屋だった。

綺麗に掃除された部屋は物音一つせず、動くことさえ躊躇われた。

「とりあえず……どこにいるんだ？」

リビングに行ってみるが誰もいない。

他に二つ部屋があったので順番に見ていく事にした。

一つ目の部屋は何も無く、二つめの部屋にはベッドがあった。ベッドには一人の少女が座っていて、その横にはご飯が置いてあったが、まったく手をつけていなかった。

「えーと、君が鳴海桃華ちゃん？」

少女はこちらを向くと小さく頷いた。

FILE28：RAN（2）（後書き）

さーど座談会

作者「落ち込むなよ」

エイリアス「これが落ち込まずにいられるか」

作者「一体どうしたんだ？」

エイリアス「初会話が本編ではなく何故後書きなんだ！ー！おかしいだろ、こんなの」

作者「出番があったことを感謝しようぜ」

エイリアス「うううううう」

FILE29:RAN(3)(前書き)

久々の更新

FILE 29 : RAN (3)

彼女をの第一印象は生気が無かった。

何を考えているか、どこを見ているかさえ分からない。
感情も色もない瞳はただ虚空を見つめていた。

「俺は朝霧渚、よろしく」

再びこちらに向き直った鳴海は小さな声で何か呟いた。

「ん？何か言ったか？」

「出て行って、一人にして、ほっというてよ」

ただ無感情にそう言い放った。

「……………」

「……………」

流れたのはしばしの沈黙。

俺は耐え切れず口を開いた。

「会っていきなりひどくないか？」

鳴海は口を開かない。

「ほら、せめて飯くらい食えよ。」

俺は食事の載ったお盆を鳴海の前まで持って行った。

「いない」

鳴海はまた小さな声で呟いた。

「そうは言っても食わないと死ぬぞ？」

ガシャン

お盆が中を舞い、食事はお盆もろとも重力に引き寄せられた。床に散らばったお盆を呆然と眺めていると視界の端が揺れた。振り向いた時には既に遅く鳴海が突っ込んできた。

体を反らそうとするが間に合わず、もろにタツクルをくらい、それでも終わらず鳴海は俺に馬乗りになり、殴り掛かってきた。

数秒間されるがままだったが、なんとか鳴海を退かせると、次は散らばったお盆を投げ付けてきた。

「出て行つて！」

「分かった！分かったから！やめろつて！」

俺の言葉を聞いて満足したのか物は投げに来てなくなったが、依然として睨まれ続けている。

「こりゃ早いところ退散すつかな」

俺は部屋の入口まで戻ると一度だけ鳴海を振り返り、部屋を後にした。

誰も居なくなつた部屋の中、鳴海は再び虚空を見つめていた。

「ああくそ、あいつぜってえ本気で殴ってきたぞ」

俺は自分の家に帰り、鏡で痣ができた顔を見ながら愚痴を零していた。

「しかし、厄介だな、院長にもどうにも出来なかったのに俺に出来るかって！」

シャワーを済ませ、タオルと牛乳を持ちソファに座る。

いつもの事だ。

少し違うことは顔の側面と肩で電話を固定していることだ。

「聞いたぜ渚、例の女の子の事頼まれたってな」

電話の向こうでニヤケてそうなのが分かるほどの声色なのは、当然ヨシユアだ。

「お前今ニヤケてるだろ」

「いや、馬鹿、これが笑わずに…クツ、フツ、いられるか」

「また笑った、だったらお前が行ってみろよ」

俺は不機嫌な顔でそう言うと、牛乳を一気に飲み干した。

「殴られるのは勘弁だからなあ、殴らなくなったら呼んでくれ」

「じゃ、お前も何か案をだせ」

空になった牛乳をテーブルに置くと空いた右手で電話を持ち直した。

「甘いものでも買って行けば？あ、あとアクセサリーとか、それで殴らなくはなるんじゃないか？」

ヨシユアは相変わらず呑気な声で答えてくれた。

「明日にでも試してみるよ、じゃおやすみ」

「おう、じゃあな」

電話を切り、空になった牛乳パックを開いて乾かす。
ドライヤーで頭を乾かすと、その日は眠りについた。

翌日、ミステルドーナツでドーナツを買い、再び鳴海の部屋の前に来ていた。

FILE29:RAN(3)(後書き)

高校生活……かなり忙しい…

執筆が進まない。

ファンタジー書くと宣言したのに書けてない。

ああ忙しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3958h/>

the Third World War

2010年10月11日13時11分発行